

コラム 9

やきものの変遷

焼物は粘土に含まれる長石が熱せられて一種のガラスに変化するもので、大きく分けて土器・陶器・磁器に分類される。土器は600°~800℃で野焼きされたもので、表面は赤みを帯びる。釉薬は塗らない。縄文土器、弥生土器、土師器がある。陶器は窖窯により1000℃を越える温度で焼かれたもので、釉薬が塗られるものと塗られないものがある。硬質で地は灰色、やや吸水性があり、主に轆轤を用いて成形される。須恵器も陶器の一種である。磁器は陶石の粉末を使い、表面に透明の釉や色釉をかけて1300℃近い高温で焼かれたもの。陶器より更に薄手で硬く、表面は白く色彩や文様に富む。吸水性はまったくない。

縄文土器

一般的には縄目の文様を特徴とする素焼きの土器で粘土の紐を積み上げて成形され、野焼き(酸化焰焼成)によって焼成された土器で、文様は回転押捺手法による。最も基本となるのは深鉢形で、初期は丸底や尖底でその後平底となる。その他に浅鉢や注口土器などがある。先行するものに隆線文・爪形文・豆粒文土器がある。

弥生土器

縄文土器にくらべ一般的に文様が単純化、無文化する。表面は刷毛目や叩き目がある。煮沸用の甕、貯蔵用の壺、供膳用の高坏・鉢・器台等用途に応じて器形が分化する。

土師器

古墳時代から平安時代まで用いられた土器で、弥生土器の流れを汲むが更に簡素化が進む。多くは甕・甔・坏・鉢等の日常用具で、一部に祭祀用の高坏・埴などがある。内面を磨いて炭素を吸収させた黒色の土器も多くつくられる。奈良時代後半から技法の簡略化と器形の減少が進み、碗・皿といった特定のものが大量生産され

る。さらに平安時代に入る頃には轆轤を用いて成形されるようになる。

須恵器

青灰色の堅く焼きしまった陶質土器で、轆轤を用いて成形し、窖窯を利用して還元焰焼成した。古墳時代中期に朝鮮からきた工人たちによりつくられはじめた。初期は儀礼等に使用されたものと考えられるが、官衙・寺院等の成立に伴い、高級品として特定階級の人々に使用された。その後しだいに日用品として普及し、120種ともいわれる多様な器種を生む。平安時代後期以降徐々に衰退する。

陶器

奈良時代に大陸から伝わり現在に至る。大きく分けて灰釉・緑釉・三彩(平安時代には消滅)・鉄釉(鎌倉時代中期以降)の他に自然釉・無釉のものがある。初期にはごく限られた階層で用いられたが、中世には一般にも広く用いられるようになる。特定製品の專業窯が各地に出現して広域にわたる地域間分業が発達し、商品として全国に流通した。中世の古窯として瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波・備前等がよく知られている。中世は壺・甕・挿鉢などの日常品に代表される。また、桃山時代には高い芸術性を備えた茶器、美濃・備前・伊賀・京焼・楽焼などが生まれる。

磁器

白磁、青磁、染付、色絵などに分類される。輸入品は平安時代からあるが、国内で本格的に生産が開始されたのは江戸時代に入ってからで、肥前で始まり、やがて全国に広がっていく。連房式登り窯で焼成される。伊万里・柿右衛門・鍋島・九谷がよく知られ、皿、壺、茶碗、鉢、香炉など器種は豊富である。

縄文土器



山田上ノ台(4000年前)

六反田(3800年前)

弥生土器



下ノ内浦

下ノ内

郡山

藤田新田(2000年前)

はじき土師器

すえき器



南小泉(1500年前)

郡山(1200年前)

陶器

磁器



鴻ノ巣(700年前)
中国産青磁

(肥前)
(300年前)

仙台城

(中国産)
(300年前)

松木(600年前)



松木(300年前)



仙台城(300年前)



松木(100-200年前、肥前)

◆^{だいれんじ}大蓮寺窯跡

遺跡番号27

宮城野区東仙台六丁目大蓮寺境内に所在する5世紀及び7世紀末から8世紀前半の窯跡。七北田丘陵東端の舌状張り出し部に立地する（標高30～40m）。台原小田原窯跡群の東端部に位置する。

昭和50年、古窯跡研究会による調査で窯跡1基が発見され、日本で須恵器生産が開始された5世紀段階の窯跡として注目された。窯は地下式無階無段窖窯で幅1.6m、全長は7m前後と推定される。窯跡からは無蓋高坏、瓿、罍、器台、壺が出土しており、祭祀儀礼に用いる須恵器を焼いた窯と推定されている。

7世紀末～8世紀前半の窯跡については前述の調査で窯の下半分に工房跡と考えられるテラス状遺構が発見され、平成2・3年の調査で窯跡、灰原などが確認された。窯跡は確実なもので5基確認されている。これらは瓦もしくは瓦と須恵器の両者を生産している。2号窯は瓦を生産した地下



大蓮寺窯跡出土 器台



富沢窯跡の発掘状況

◆^{みかみね}富沢窯跡と三神峯古墳群

遺跡番号28

太白区三神峯一丁目に所在する。三神峯丘陵南斜面に立地する（標高約40m）。昭和49年古窯跡研究会によりハニワ窯跡1基が調査された。地下式無階無段の登窯で全長は約9.8mである。出土遺物には円筒ハニワと朝顔形ハニワの他、祭祀に用いられたと思われる土師器坏・鉢・壺と鏡を模した石製模造品がある。年代は5世紀後半より6世紀初め頃と考えられている。ここで生産されたハニワは大野田古墳群など名取・広瀬川流域の古墳に供給されたと考えられている。

この窯跡の斜面上方数十mのところ、三神峯公園内に三神峯古墳群（2基以上）がある。円墳で1号墳は径約16mである。平成3年、東北大学埋蔵文化財調査室により、この1号墳から富沢窯跡系列の円筒もしくは朝顔形ハニワが採集され、製作者との関係が注目されている。県内でハニワを有する円墳で墳丘が完存している唯一の古墳群として貴重である。

式窖窯で長さ7.5m以上、焼成部には階段状の施設を設けている。現段階では瓦などの供給先は東方1.5kmの燕沢遺跡の可能性が高い。多賀城創建以前の初期瓦窯跡として注目される。

◆栗遺跡

遺跡番号29

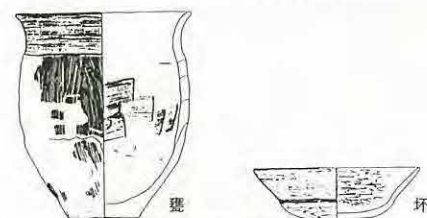
太白区西中田七丁目に所在し、名取川南岸の氾濫原に複雑に形成された微地形の自然堤防に立地する。昭和20年代に畑の開墾時に発見され、昭和32年に「東北史学会」で『栗園式土師器』として発表されて以来、東北地方における7世紀代の土師器編年の標準資料（土器年代の尺度）として学界に知られている。器形の特徴は、長胴の甕の胴部と口縁部の境に段をもつ点と、坏形土器が口径の割に器高が低くなり、口縁部と体部の接続部分の内外面に括れが認められる点にある。

遺跡の調査は、昭和49・50年の街路工事及び昭和56年の西中田小学校建設工事に伴って行われ、合せて40軒の堅穴住居跡が発見された。住居跡には火災で焼失したものがあり、1軒の住居で使われる土器の種類と、置き場所を知ることができた。

考古学史的にも、仙台平野における古墳時代末期を代表する集落跡としても貴重な遺跡である。



白線で方形で囲まれた部分が住居跡



「栗園式土師器」

◆^{ほうりょうづか}法領塚古墳

遺跡番号30

若林区一本杉、聖ウルスラ学院校内に所在する古墳。広瀬川の自然堤防上に立地する（標高約12m）。昭和45年、市教育委員会を主体とし氏家和典氏を担当者とする調査により次のような事が判明した。①墳丘径32m前後、高さ6m前後で周溝をもつ。②主体部は巨大な横穴式石室で玄室の奥行きは5.76～5.67m、高さは1.88mである。③奥壁、玄門、天井部には巨石を使用し、底面には玄室の奥半分まで凝灰岩切石を敷いている。④盗掘にあい出土遺物は少量であるが直刀、くつわ等の鉄製品、銅鏡、須恵器、土師器、コハク玉が破片で出土しており、本来、巨大な横穴式石室に葬られた支配者にふさわしい豊富な副葬品があったと思われる。年代は7世紀前半頃とされている。

本古墳の南方約350mに猫塚古墳（前方後円墳？）があり、この間に蛇塚古墳があった事から法領塚古墳を主墳とする古墳群が形成されていたと考えられる。



法領塚古墳



法領塚古墳石室内部

◆安久諏訪古墳

遺跡番号31

安久遺跡内にあった古墳。昭和55年の調査で全長6.4mの横穴式石室をもつ、推定径15m前後の円墳である事が判明した。年代は7世紀頃と考えられる。付近一帯には鉄製馬具・武器等を副葬する安久東遺跡5号石室を含む安久・安久東古墳群(7~8世紀)が分布するが、本古墳はその中心的な古墳といえる。(現在、安久東公園に石室を移築)



安久諏訪古墳石室

古墳時代のその他の遺跡

高塚古墳は市内で40余認められ、本文で紹介されたもの以外では千人塚古墳(宮城野区)、孝勝寺境内古墳(青葉区)、下飯田薬師堂古墳・猫塚古墳・梅塚古墳(以上若林区)、金岡八幡古墳・砂押古墳・金洗沢古墳・大塚山古墳・城丸古墳・弁天岡古墳・伊豆野権現古墳(以上太白区)などが現存している。太白区泉崎の教塚古墳は近年、惜しくも宅地造成により壊滅した。集落跡では中田畑中遺跡(4・7世紀)、藤田新田遺跡・六反田・伊古田・下ノ内・安久東・燕沢遺跡(4~5世紀)など古墳時代前・中期の集落跡が多く調査されている。水田跡は富沢遺跡で5世紀の小さな区画をもつ水田跡が調査されている。



富沢遺跡の5世紀の水田跡

コラム10

墓制の変遷

死者をどのように埋葬するかは、時代の変遷と共に変化する。本来、保守的な墓制が大きく変化する時には、その背後の社会や文化の変化を読みとれる場合もある。さて、埋葬の形態には手足を折り曲げる屈葬と手足を伸ばした伸展葬等があり、この二形態が基本となる。これらは、縄文時代以降に確認できる。一方、墓の形態は時代や地域によって多様である。縄文時代には、土中に穴を掘るだけの土壙墓が一般的であり、その後も基本的な形態となる。他に、配石墓・甕棺墓・石棺墓等があり、墓域が信仰の対象となるこの時代特有の環状列石等もある。弥生時代には上記の他に、支石墓・再葬墓・方

形周溝墓等が出現する。墓の周囲に区画溝を設けたり、1つの墓を中心に複数の墓が集合する等の現象が現われ、副葬品にも差がみられるようになる。これらの特徴は、集落内部に階層差が生じてきたことを反映するものであろう。古墳時代には、土を高く盛った高塚古墳が出現する。古墳は形態差から、前方後円墳・円墳・方墳等に分類され、各地域の支配者を象徴し、この時代を特徴づけている。やがて、丘陵の崖に墓室を掘り込んだ横穴墓が盛行し始めると、古墳は衰退していく。その後、仏教の影響を受けて火葬が出現し、蔵骨器の使用や銅銭の副葬が始まり、墓制も大きく変化する。

飛鳥・奈良時代

飛鳥周辺を中心として政治が行われ、仏教文化が花開いた時代を飛鳥時代、本格的な都が平城京に造営され、平安京に遷都が行われるまでの期間を奈良時代という。その期間は概ね7世紀から794年までである。この時代は大陸の制度の模倣と仏教を通じての国家経営の確立時期といえよう。

この時代の市内の遺跡としては、官衙・寺院・集落跡・横穴墓群など多彩な遺跡があり、陸奥国の中心地として重要な役割を果たしていたことが、如実に窺われる。

郡山遺跡は7世紀後半(白鳳期)の地方統治の拠点としての官衙跡で広大な面積に計画的に施設が配されていたことが、徐々に明らかになりつつある。また、7世紀末にはこれらの施設群を一旦撤去し、新たに真北に軸線を置き428m四方を材木列と大溝で取り囲んだ官衙として一段の充実が図られるとともに、これに近接して寺院も建立されている。

聖武天皇の詔により全国に建立された国分寺の一つ、陸奥国分寺は8世紀中頃の大規模な寺院で、南大門・中門・金堂・講堂が一直線に並び、中門・金堂を回廊でつなぎ、金堂東側には回廊を巡らした七重塔が聳える全国有数の国分寺であった。これらの国家的施設の造営には膨大な物資と人員が投入されたものと考えられるが、それを裏付けるように台ノ原・小田原丘陵には瓦や土器を焼いた窯跡がいたるところに残り、大年寺山周辺や燕沢(善応寺横穴墓群)、岩切(台屋敷・入生沢横穴墓群)などには横穴墓群が残っている。



陸奥 徳丹城	陸奥 中山	陸奥 志波城	陸奥 胆沢城	出羽 由利	出羽 秋田	陸奥 多賀城	陸奥 伊治城	陸奥 小(進)勝城	陸奥 小(進)勝城	陸奥 玉造	陸奥 新田	陸奥 多賀城	出羽 多賀城	出羽 出羽	越後 都賀	越後 淳足
八二四(弘仁五年)	八〇三(延暦二十二年)	八〇三(延暦二十二年)	八〇二(延暦二十一年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七五八(天平宝字二年)	七〇九(和銅二年)	七〇九(和銅二年)	六五八(斉明四年)	六四七(大化三年)

東北地方の城柵遺跡位置図

◆郡山遺跡

遺跡番号32

太白区郡山二~六丁目、広瀬川と名取川にはさまれた郡山低地の東側、標高8~12mの自然堤防上に立地する。現況は住宅地と畑地・水田が混在しているが、近年宅地化が著しい。

官衙・寺院に関連する遺構群は大別すれば、2時期にわたり、5つに分けられる。1時期目は7

世紀後半代で、(1)I期官衙が置かれていた時期。2時期目は7世紀末~8世紀初頭で、(2)II期官衙が置かれていた時期である。さらにII期官衙の時期には官衙の南側に、(3)付属寺院(郡山廃寺)、(4)官人居宅、(5)官衙関連施設がある。

I期官衙の正確な規模は不明であるが、東西400m、南北600m以上の広がりを持ち、官衙院・倉庫群・中枢地区・竪穴群など堀で区画されたい

くつかの建物群からなる。これらの建物群は真北から東に30~40度ふれて位置する。7世紀後半代の国衙相当の官衙かと考えられる。Ⅱ期官衙は真北基準の方四町規模で、中心部に政庁を、周囲に材木列(柵)と大溝の外郭を持ち、多賀城創建以前の初期陸奥国府と考えられる城柵である。郡山廃寺は推定方二町の寺域の中に東西81m、南北132m程とみられる中樞伽藍域があり、Ⅱ期官衙の付属寺院と考えられる。

昭和54年、郡山三丁目地内で宅地造成の事前調査として初めて発掘調査が実施され大型の掘立柱建物の柱穴や土坑とともに、多量の土器や瓦が出土した。調査成果を検討した結果、それまで知られていた郡山遺跡の北側に一辺三町(一町=107m)程の方形地割りのあることがわかり、発見した遺構・遺物からも一般集落とは異なった官衙・寺院等の遺跡と推定されるに至った。以来、平成3年に至るまで、93次にわたり継続的な調査が実施されている。

55年には真北基準の官衙外郭に直径30cm程のクリ材をすきまなく立て並べた材木列と、その9m程外側に幅3~5m、深さ1m以上の大溝が発見され、三町半程と考えられていた官衙(Ⅱ期官衙)の規模が方四町と推定されるに至った。また外郭の要所には櫓状の建物があることも確認された。56年にはⅡ期官衙の外郭南から基壇礎石建瓦葺の付属寺院の講堂が発見された。また、写経用の定木や「学生寺」と書かれたものなど3点の木簡も出土した。57年、58年はⅠ期官衙の調査を行い、多数の遺構を発見、Ⅱ期官衙を上回る規模であることが判明した。また、Ⅱ期官衙の井戸跡からは100個体にも及ぶ土師器の甕が一括して出土し、祭祀儀礼に伴うものと考えられた。59年にはⅡ期官衙外郭北辺を確認した。60年にはⅡ期官衙外郭から直径50cmのクリ材も生々しく八脚門以上の規模の南門が発見されるとともに、政庁建物等の他、Ⅰ期官衙の倉庫群等も発見された。61年には郡山廃寺としたⅡ期官衙付属寺院の調査を行い、寺院中樞の区画材木塀・僧房建物群等が発見した。

第65次調査は郡山中学校建設に伴う事前調査で、平成2年度まで継続して行われ、廃寺東側でⅡ期官衙段階の官人の居宅と考えられる建物群や官衙の長大な建物群が発見された。同中学校の建



大規模な掘立柱建物と並ぶⅠ期官衙



栗材をすきまなく並べた材木列



Ⅱ期官衙 外部南門の掘立柱根

設に際しては特に重要な遺構部分について、保存のために1階部分を持ち上げ、ピロティーとして遺構の復原展示施設とした。

62年には廃寺西側で伽藍中樞区画西辺を確認した。63年にはⅠ期官衙の倉庫・板塀や中樞施設と考えられる建物群等が発見された。平成元年にはⅡ期官衙の政庁正殿が確認されるとともに、その北側からは石敷や石組池等が発見され、特異な政庁施設があったことがわかった他、官衙の南外側にあたる廃寺との間で、政庁正殿と同規模の四面廂建物跡が発見された。2年にはⅠ期官衙の倉庫建物・鍛冶工房跡等が発見された。

出土遺物は土師器・須恵器・瓦等であるが、関東地方や畿内から搬入された土師器や漆の搬入に使用された須恵器、「刀筆の吏」を裏付ける刀子や硯、県内では類例のない鷲尾とよぶ特殊な瓦も発見されている。



郡山廃寺の瓦



円面硯と刀子



郡山遺跡全体図



Ⅱ期官衙の井戸跡から出土した大量の土師器



Ⅱ期官衙 政庁の石組池

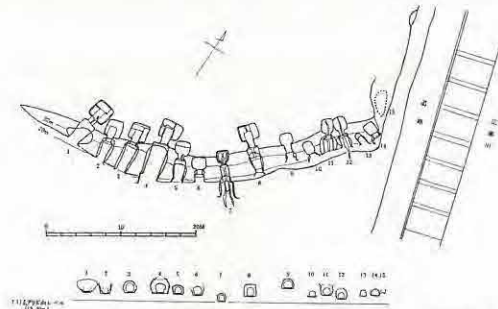
◆ 大年寺山横穴墓群 遺跡番号33・34・35・36・37

太白区向山四丁目・根岸・ニツ沢一帯の青葉山丘陵の支丘である愛宕山・大年寺山の北・東・南斜面に立地する。大別すれば「大年寺山北横穴群」と「大年寺山南横穴群」に分けられる。北群は「愛宕山」「大年寺山」「宗禅寺」、南群は「茂ヶ崎」「ニツ沢」の各支群からなる。

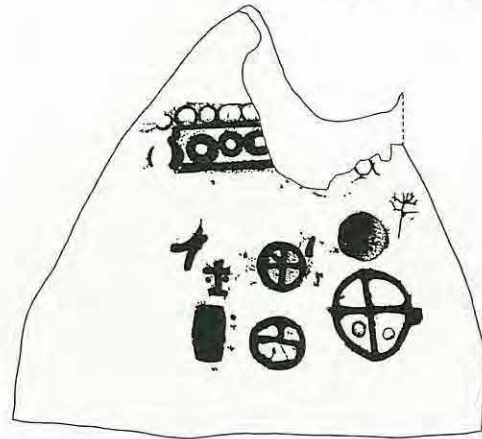
これまでの数回にわたる調査の結果、愛宕山11基、大年寺山27基、宗禅寺15基、茂ヶ崎25基が確認され、未調査のものを含めると一帯には合計100基を超える横穴墓があるものと推定され、仙台平野南部にあって、ひとつの群を形成していたものとみられる。被葬者集団の特定はできないが、出土した副葬品の在り方や、7～8世紀と考えられる築造時期などから、律令官人や地方の豪族等の有力者の墓と考えられる。特にこの丘陵南東平野には陸奥国初期官衙・寺院跡とみられる郡山遺跡があることから、大年寺山一帯は官人・僧侶階級の一大墓域になっていたものと考えられる。



宗禅寺横穴墓群



宗禅寺横穴墓群配置図



愛宕山横穴墓の装飾壁画



大年寺山横穴墓群 4号横穴出土 鬘

最初の本格的発掘調査は昭和48年、道路建設工事の事前調査として、愛宕山横穴群B地点で9基が調査され、須恵器・人骨が出土した。49年、道路建設工事並びに墓地造成工事の事前調査として、宗禅寺横穴群で14基が調査され、須恵器・土師器・刀子が出土した。

51年、愛宕山横穴群C地点で、道路建設工事中に1基発見され、緊急調査された。この結果、玄室奥壁に朱で描かれた○や⊕などの装飾が発見され、保存措置が講ぜられた。これらの墓群の造営年代はいずれも7世紀後半～8世紀前半と考えられた。

62年、崩壊危険崖面を保護する治山工事の事前調査として大年寺山横穴群で、12基が確認、内10基が調査され、刀・剣等の武具、馬具、耳環・玉等の装身具、須恵器が出土した。さらに同年の2次調査では、17基が調査され、内1基から赤彩装飾が発見された。造営年代は6世紀末～7世紀代と考えられた。

63年、大年寺山南東斜面のニツ沢（現東北工業大学敷地）で、大学キャンパスの造成工事中に新たに25基の横穴が発見され、茂ヶ崎横穴群として緊急調査が実施された。この結果、刀・鏃・弓金

具等の武具、耳環・玉等の装身具、土師器、須恵器が出土した。造営年代は7世紀後半～8世紀前半と考えられた。



大年寺山横穴墓群6号横穴出土 直刀



大年寺山横穴墓群出土土器（左端は銅鏡）以上2点 宮城県教育委員会



茂ヶ崎横穴墓群の調査風景



茂ヶ崎横穴墓群出土の勾玉と管玉

【仙台市指定史跡】
◆ 善応寺横穴墓群

遺跡番号38

○指定年月日：昭和43年2月15日

宮城野区燕沢二丁目に所在する。仙台市街地の北側を東に延びる台原・小田原丘陵の東縁部斜面に立地する。

被葬者集団の特定はできないが、出土した副葬品からみて一般庶民とはみなし難く、官人や地方の豪族等の有力者の墓と考えられる。

これまでに、第2次大戦前に2基の調査、昭和23年に開口していた横穴の測量調査、25年に1基、35～36年に2基の発掘及び開口横穴の測量調査、42年には8基の発掘及び戦後調査分計23墓の横穴墓群全域の確認、測量調査が行われた。

未調査分を含めると一帯には数十基の横穴墓があるものと推定され、仙台平野北部にあって、ひとつの群を形成していたものとみられる。出土した副葬品からみて、7～8世紀に築造されたものと考えられる。



善応寺横穴墓群の現在の状況

〔国指定史跡〕

◆ 陸奥国分寺跡

遺跡番号39

○指定年月日：大正11年10月12日

国分寺は聖武天皇が、奈良時代の天平13年(741年)に仏教による国家の安泰と理想国家の達成をめざして発した詔によって全国64ヶ国に建立された。東大寺が総国分寺としてその頂にあたり、盧舎那仏(大仏)を世界の中心に仰いだ。

この時期は古代国家が完成しその繁栄期にあたり、諸国にあって国分寺はその文化的施設の中心的存在として「国華」とよばれ、国府に近い環境良好な土地に建てられた。

陸奥国分寺は国府多賀城の西南9.5kmの歌枕の地として知られる「宮城野」の、若林区木の下に所在する。最北の国分寺として知られ、大正11年に国の史跡指定を受けている。昭和30年から34年にかけて行われた学術調査で寺院の概要が明らかになり、さらに昭和47年以降は整備のための調査が行われている。

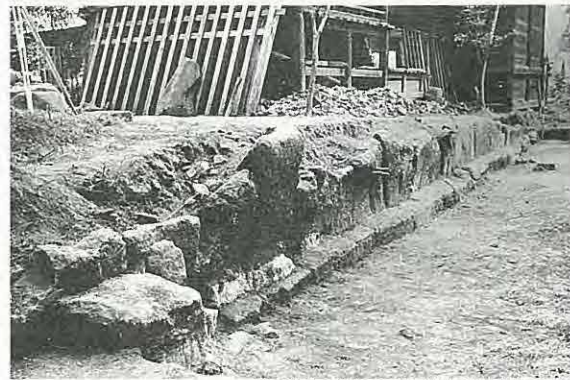
調査の結果、陸奥国分寺は東西約240m(800尺)、南北は北辺が不明であるが800尺以上の築地塀で囲まれた伽藍地を有する大規模な寺院であることがわかった。また伽藍配置は伽藍地の中軸線上に南大門・中門・金堂・講堂・僧坊を備え、中門と金堂を回廊で結び、金堂と講堂の間には東に鐘楼・西に経楼を、金堂の東には回廊の巡る七重塔を配置する壮大なものであったことを、礎石や礎石の下の根石の位置から知ることができた。遺物としては多量の瓦や塔の相輪の一部等が出土し、瓦の様子は国府多賀城と共通している。

陸奥国分寺の創建年代は740～50年代と考えられ、その後の推移については文献資料から、貞観11年(869年)に大地震による被害を受けて修理をしたこと、承平4年(934年)に落雷のため七重塔が焼失したことがわかっている。

古代国家の保護のもとに栄えた大寺院も、律令制の衰えとともに衰退し、中世にはわずかな草堂が残るだけであった。近世になると藩主伊達政宗により復興され、薬師堂が講堂跡に、仁王門が南大門跡に建てられ、今日にいたっている。



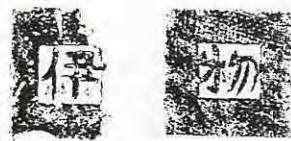
陸奥国分寺跡全景



昭和32年の調査で千年ぶりに現れた塔の基壇

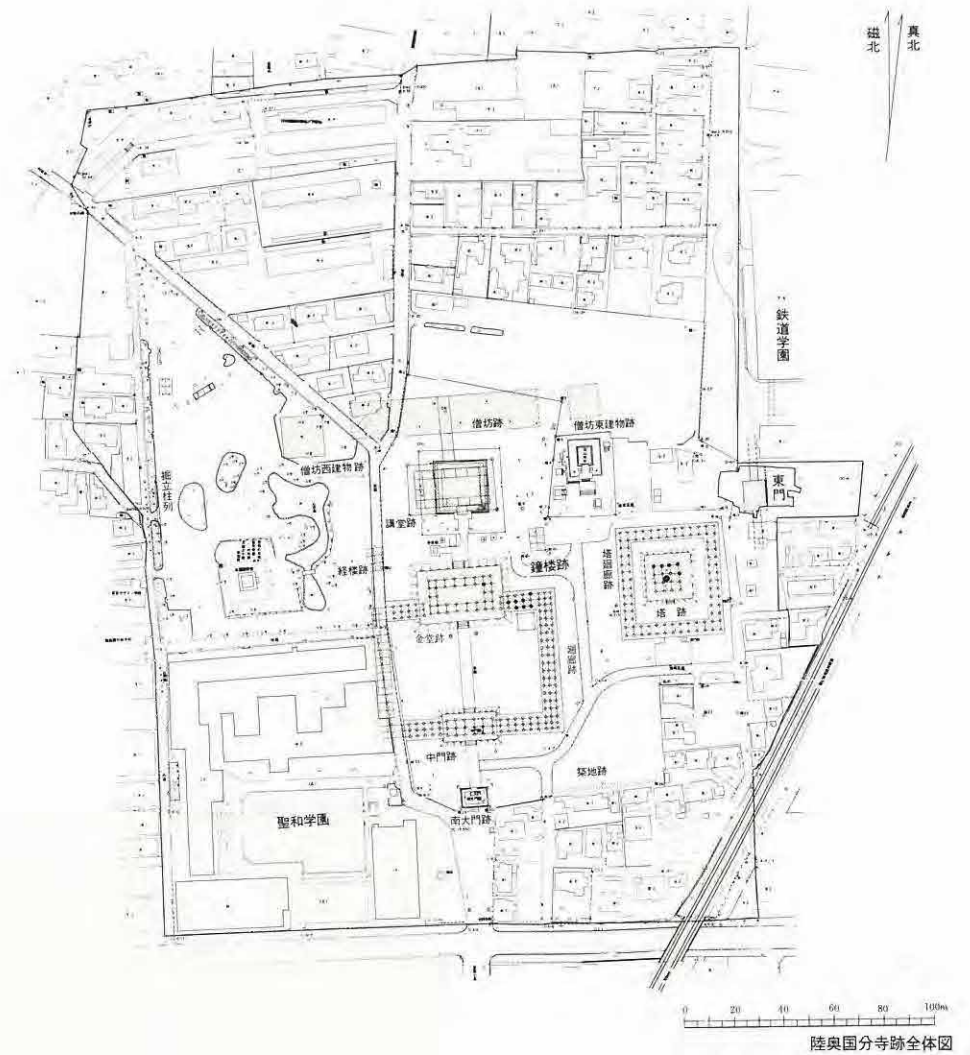


陸奥国分寺創建期の軒瓦



瓦にはスタンプや指書・ヘラ書きで、地名や人名を記したと考えられるものがある。左の伊は「伊具郡」、物は「物部」の略号だろうか。

文字瓦



陸奥国分寺跡全体図

〔国指定史跡〕

◆ 陸奥国分尼寺跡

遺跡番号40

○指定年月日：昭和23年12月18日

陸奥国分尼寺は陸奥国分寺(僧寺)と同時期に建立され、僧寺の東方500m程の若林区白萩町に所在する。昭和23年に史跡に指定されている。

かつて「観音塚」とよばれ、礎石が露出した土壇があり、昭和39年に調査が行われ、正面5間(9.85m)・側面4間(8.5m)の建物が確認された。この建物は金堂跡と考えられている。伽藍地の規模については不明であるが、僧寺の半分の方400尺(約120m四方)、あるいはそれ以下と推定される。

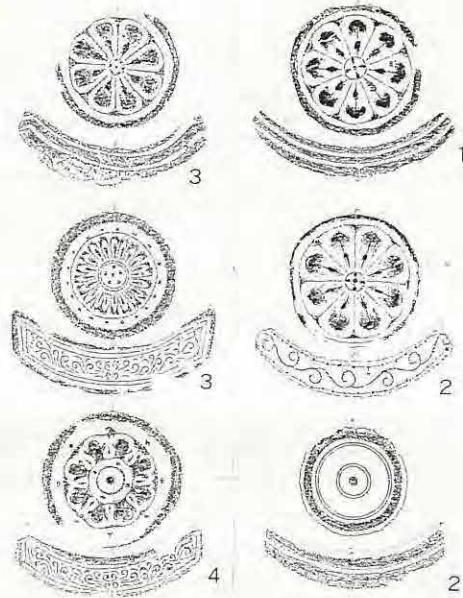


「観音塚」の調査の様子

コラム11

軒瓦の変遷

古代の寺院・官衙の建物の屋根には瓦が葺かれた。それらの瓦の大半は丸瓦と平瓦で、軒先には文様で飾った軒丸瓦・軒平瓦を葺いた。軒丸瓦の代表的な文様は蓮華文―ハスの花であり、軒平瓦では唐草文や重弧文がある。蓮華文は花卉の形から、単弁（重弁）と複弁に大別され、唐草文も均整や偏行にわけられ、文様の細かな違いにより、多くの様式に分類される。両者の文様は時代により変遷がみられることから、軒丸・軒平の組み合わせをみることで、瓦窯の操業年代や瓦葺き建物の造営年代を知ることができる。



軒瓦の変遷 (番号は変遷順)

◆ 神柵遺跡

遺跡番号41

若林区沖野二丁目、市街地東部に広がる沖積平野、標高9～10mの自然堤防上に立地する。

古くは神柵・中柵・館等の字名が残り、遺跡の東側一帯には古代の条里地割の痕跡がみられた。柵はヤライとも読み、矢来（＝囲まれた土地）に通じる。掘立柱建物跡・堀跡の配置、出土遺物の状況から、律令制により郡・郷等に置かれた行政機関に関連する施設の遺跡と考えられる。

平成3年にはじめて調査が行われ、掘立柱堀跡1列、掘立柱建物跡5棟、土坑76基、溝跡71条等が発見された。堀跡や建物跡は方向の違いから2つにわけられ、一般集落では殆どみられない規模のものである。建て替え等による2時期の変遷があったものと考えられた。出土遺物は土師器・須恵器・硯・鉄滓等であるが、須恵器の数が集落遺跡にくらべ多い。土器類の年代は8世紀後半～9世紀と考えられた。なお、調査の結果、遺跡の規模は当初考えていたものより大規模であることが明らかとなった。



神柵遺跡付近の条里跡 (昭和22年撮影)

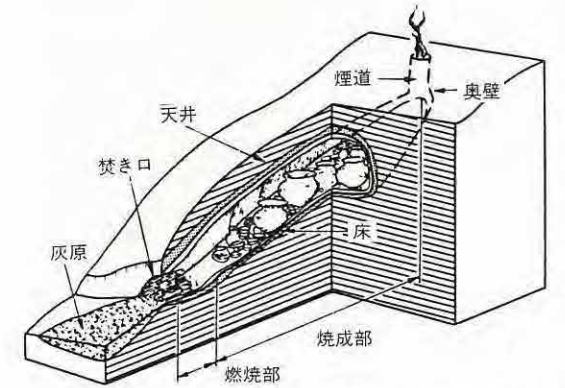


神柵遺跡調査風景

コラム12

窯の構造と変遷

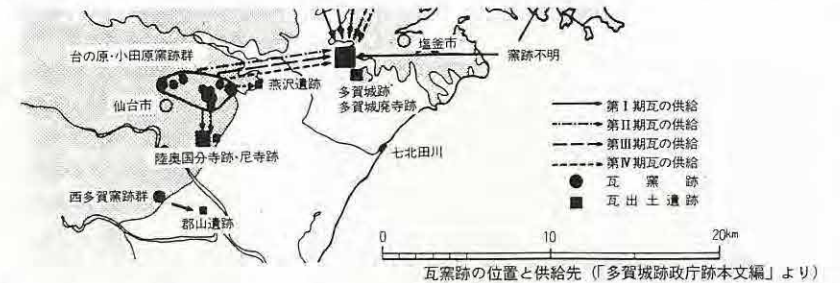
瓦や須恵器を焼く窯は原料の粘土と燃料の薪に恵まれた丘陵の斜面を利用して築かれる。丘陵斜面を掘って築かれた古代の窯を「窖（穴）窯」と呼び、16世紀末以降の連房式窯を「登窯」と呼んで区別しているが、焼成部の傾斜角度の違いから、ほぼ水平なものを「平窯」、急なものを「登窯」と呼ぶ人もいる。窖窯には、斜面をトンネル状に掘り抜いた「地下式」のものと斜面に窯下半部にあたる溝を掘り、溝の上部に木の枝などで骨組みを作り、その上にスサ入り粘土で固めた天井部を構築させる「半地下式」のものがある。東北地方では、奈良時代後半の国分寺造営以降に「半地下式」窖窯へと窯構造が変化するとされている。



須恵器窯（地下式窖窯）の模式図

※瓦窯は本来、焼成部に瓦を置くための階段を有しているが、瓦の台で代用している例も多い。

瓦の供給先 北部の台原・小田原窯跡群は陸奥国官窯であり、瓦は多賀城・多賀城廃寺・陸奥国分寺・尼寺・燕沢遺跡に、南部西多賀の窯跡群内の西台窯跡(湮滅)の瓦は郡山遺跡に供給された可能性が高い。古代の瓦の供給先は官衙(役所)や寺院のみであり、中世でも寺院や城である。庶民の屋根瓦は江戸時代以降である。



瓦窯跡の位置と供給先 (「多賀城跡政庁跡本文編」より)

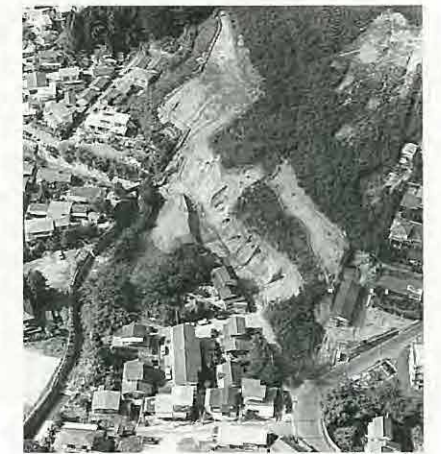
◆ 土手内窯跡

遺跡番号42

はないが、東方約2.5kmに所在する郡山遺跡との関連が考えられる。

太白区土手内一丁目の標高30～40mの南斜面に立地する。平成元年宅地造成に伴い発掘調査が行われ、横穴墓群と重複して3基の窯跡が検出された。全て地面をトンネル状に掘り抜いた「地下式窖窯」である。斜面の削平のため燃焼部以下が失われており規模は不明である。出土遺物には須恵器片及び須恵器の甕の体部を加工して利用した焼台があり、須恵器専用窯であると考えられる。

重複している横穴墓が窯跡より新しいことが判明しており、出土遺物より7世紀末から8世紀頃のものと考えられ、窯跡についても7世紀代のものと考えられる。また、製品の供給先は明らかで



遺跡の遠景

◆ 台原・小田原窯跡群

遺跡番号43

青葉区台原・小松島、宮城野区蟹沢・二の森・榊江・安養寺・東仙台の広い範囲にわたる地域に散在する。

仙台市街の北側を西から東にのびる、標高50～100mの台原・小田原丘陵の南斜面にいくつかのブロックをつくって立地する。

古墳時代中期の須恵器生産から、昭和初期の堤焼きまで、長期間にわたる一大窯場となっているが、最盛期は奈良時代から平安時代に陸奥国分寺・尼寺、陸奥国府多賀城の建物屋根瓦の生産を行った時期で、陸奥国官窯として多くの窯が操業した。

窯跡は西から、堤町・荒巻一本杉・五本松・杉添東・五城中学校北・一本松・小田原長命坂・長命荘・南小沢・与兵衛沼・庚申前・二ノ森・榊江・神明社・安養寺排水場・三高西・安養寺中圃・安養寺圃・安養寺下圃・安養寺下・小田原前田・土手前・鶴ヶ谷・大蓮寺・燕沢公園の各窯跡が連なっていて分布している。

昭和41年、東北学院大学により安養寺中圃瓦窯跡で5基の半地下式窖窯の調査が行われた。宝相華文軒丸瓦・細弁蓮華文軒丸瓦・齒車文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦や風字硯等が出土している。

44年、東北学院大学により、庚申前窯跡で5基の地下式窖窯が調査された。1基は須恵器のみ、4基は須恵器・瓦併用の窯跡とみられる。

46年、古窯跡研究会により、蟹沢中瓦窯跡で3基の調査が行われた。内1基は半地下式の平窯で

ある。重圏文軒丸瓦・単弧文軒平瓦、刻印瓦等が出土している。

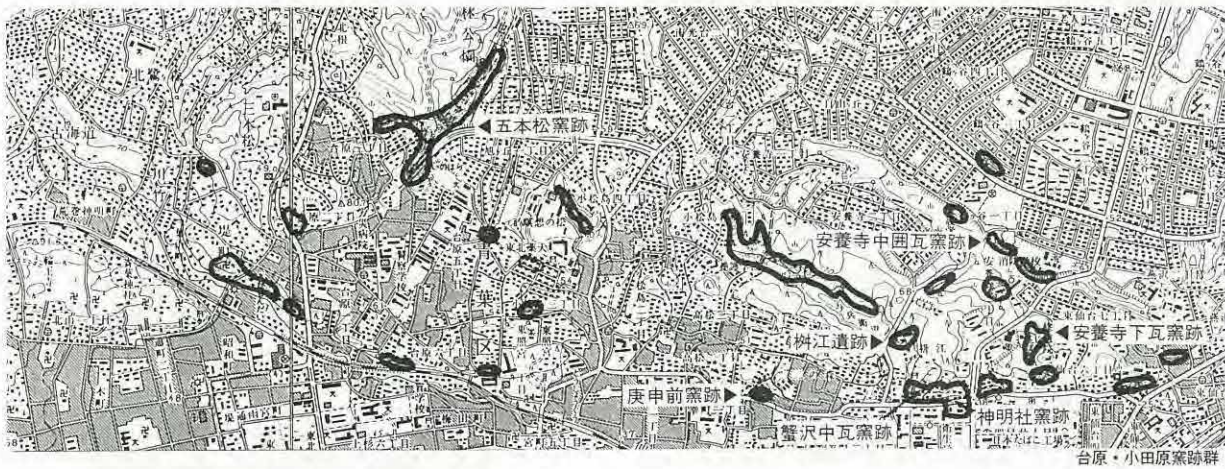
47年、古窯跡研究会により安養寺下瓦窯跡で3基の半地下式窖窯の調査が行われた。この調査を第1次として、62年の第2次以降、平成3年の第



榊江遺跡 窯跡の調査風景



大蓮寺窯跡（7世紀）



台原・小田原窯跡群

6次まで、同研究会により継続的に発掘調査が進められている。17基の瓦窯跡が明らかとなり、重弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒丸瓦・偏行唐草文軒平瓦や刻印瓦等多くの瓦、須恵器が出土している。

同47年、市教育委員会により五本松窯跡で2基の半地下式窖窯が調査され、その後、60～61年には15基の半地下式窖窯が調査された。瓦・須恵器の併用窯とみられる。陰刻花文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦・須恵器等が出土している。

50年、古窯跡研究会により、大蓮寺窯跡で東北最古の古墳時代の須恵器窯1基が調査されている。その後、平成2・3年、市教育委員会により7世紀後半～8世紀前半の地下式・半地下式窖窯6基が調査された。単弁蓮華文軒丸瓦・ロクロ挽き重弧文軒丸瓦・須恵器等が出土している。

52～54年、市教育委員会と古窯跡研究会により榊江遺跡の調査が行われ、半地下式窖窯5基とともに堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡8棟が発見され、瓦工房跡かと考えられた。重弁蓮華文軒丸瓦・単弧文軒平瓦や刻印瓦が出土している。

55年、市教育委員会により神明社窯跡の調査が行われ、堅穴住居跡・堅穴遺構6軒、掘立柱建物跡11棟等が発見され、造瓦所と考えられた。重圏文軒丸瓦・細弁蓮華文軒丸瓦・単弧文軒平瓦や鬼板・刻印瓦が出土している。

—— 飛鳥・奈良時代のその他の遺跡 ——

宮城野区の燕沢遺跡は飛鳥・奈良・平安時代にわたる役所跡又は寺院跡と推定されている遺跡である。付近で表採された飛鳥時代の軒丸瓦は遺跡の性格を考える上で特筆される遺物である。集落跡では名取川流域の六反田・山口・下ノ内・下ノ内浦・下飯田遺跡、七北田川流域の岩切畑中遺跡で堅穴住居跡が検出されている。このうち下飯田遺跡は郡山遺跡の掘立柱建物に匹敵する大きさの柱を残している堅穴住居跡を含む7世紀末～8世紀初めの大規模集落跡として注目される。また、岩切の鴻ノ巣遺跡は円面硯を出土した柱列状遺構があり注目される。富沢遺跡では7世紀の水田跡が調査されている。



安養寺下瓦窯跡



燕沢遺跡出土の四弁蓮華文軒丸瓦



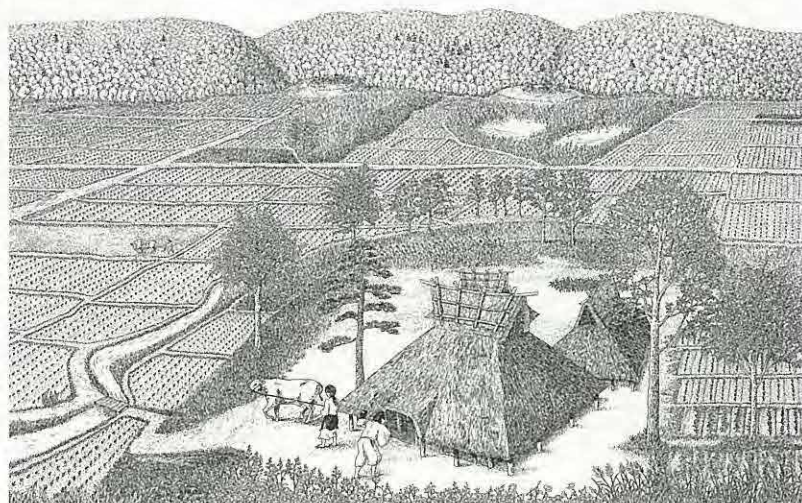
富沢遺跡（30次調査）の7世紀の水田跡



下飯田遺跡の住居跡

平安時代

平安時代は、794年に京都に都が置かれ、鎌倉に幕府が成立する1192年までをいう。この時代は公地公民制がくずれ、荘園制へと大きく変化していく。政治的には摂関政治、続いて院政が行われ、終わり頃には各地に形成された武士団が次第に勢力を増し、源氏や平氏が政治に大きな影響力を持つようになる。市内には一般の人々の集落跡を中心に数多くの遺跡が残る。台ノ原・小田原丘陵には引き続き瓦や土器を焼いた窯跡群があり、水田跡は富沢遺跡や赤生津遺跡などで発見され、茂庭の峯山C遺跡では製鉄の跡が、泉区と黒川郡境の堂庭山山頂付近には宝塔跡が残る。



山口遺跡 平安時代の環境復元図（微高地から北方の後背湿地を望む）

五本松窯跡群

遺跡番号44

青葉区台原森林公園周辺の丘陵斜面に点在（A～G地点）する平安時代の瓦や須恵器を焼いた窯跡群である。これまでに調査された17基の窯跡は全て半地下式窯である。D地点では、窯の天井部の芯材や窯跡8基に架かる覆屋跡が発見されている。細弁蓮華文・宝相花文・歯車文・陰刻花文などの軒丸瓦や均整唐草文軒平瓦が出土しており、貞観11年（869年）の陸奥国大地震後の復興瓦として、多賀城や陸奥国分寺へ供給されている。



陰刻花文軒丸瓦

五本松窯跡D地点



D地点 8基の窯の覆屋跡（子供が柱の位置）

仙台の遺跡

山口遺跡

遺跡番号45

太白区富沢一丁目に所在する。昭和56年、現在の仙台市体育館の敷地が調査され、県内で初めて水田跡（平安時代・中世）が発見された。平安時代には自然堤防側に堅穴住居等からなる居住域、後背湿地側に水田が営まれ、両者を区切るように溝・河川が走っている景観が考えられる。水田跡は「条里型」とされる東西に長い長方形をしている。



山口遺跡水田跡

八幡西遺跡

遺跡番号46

太白区山田字八幡西に所在する平安時代の集落跡で舟渡前遺跡に含まれる。名取川北岸の自然堤防上に立地する（標高24m）。昭和51年に調査された堅穴住居跡は火災にあったためか当時の日常器物を良く残していた。堅穴住居跡は平面形が隅丸方形で東西約3.1m、南北約4mあり、壁は高いところで約45cmである。床面には建築材が炭化して残っていた。カマドは芯となっていた石組等が残存し周辺から土師器の甕・坏、須恵器の甕・坏、鉄製鋤先・刀子が出土しており9世紀頃の生活を物語っている。



八幡西遺跡堅穴住居跡 炭化した建築材などから火災があったことがわかる

嶺山C遺跡

遺跡番号47

太白区茂庭台に所在する遺跡で、茂庭台団地南端の越河堤北側の谷に立地する。昭和55年の発掘調査によって、平安時代の製鉄遺構が検出されている。製鉄遺構は、丘陵の谷際の斜面を削り、東西に長い約20×5mの平場を造りだし、中央に製鉄炉、その両脇に資材置き場・作業場などが設けられている。平場の下の谷からは製鉄の際に出た不純物の塊（鉄滓）が多数出土している。製鉄に用いられた砂鉄の産出地に関しては、遺跡に近い高田地区付近の岩ノ川流域が最も有力視されている。



鉄滓（直径約4cm）



製鉄炉の底の部分

あこうづ
◆ 赤生津遺跡

遺跡番号48

泉区七北田字赤生津にある、縄文時代晩期～平安時代の遺跡で、七北田川が形成した最低位の河岸段丘上に立地している。

遺跡の大部分は平安時代の水田跡であるが、遺跡西端や水田跡の下層からは縄文時代晩期～弥生時代の遺物が発見されている。特に注目されるのは10世紀前半に降下した灰白色の火山灰に埋没した平安時代の水田跡である。火山灰の堆積状況から、火山灰降下後まもなく、周辺から流入した火山灰によって埋没し、廃棄されたと考えられる。



灰白色火山灰におおわれた水田跡

どうにわ
◆ 堂庭廃寺

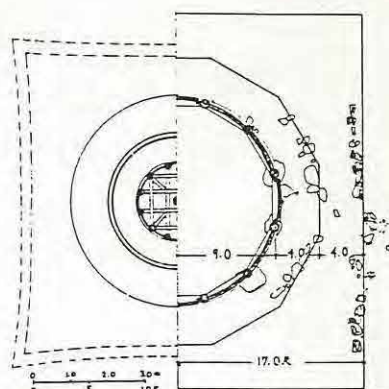
遺跡番号49

泉区根白石字堂所山、黒川郡との郡境付近の標高約240mの堂庭山山頂付近に立地している。

昭和43年に発掘調査を実施した結果、瓦積の基壇、瓦積の基壇の中から円形にまわる礎石が発見された。礎石が円形にまわることから建造物は宝塔跡であることが明らかになった。

出土遺物の年代から10世紀前半頃に位置づけられ、多賀城の西域を守る鎮護の寺院と考えられている。

宝塔の例としては全国的にも初期に属するものである。なお、その建築概要は塔身直径十八尺、総高約五〇尺、屋根は恐らく桧皮葺か柿葺であったと考えられる。



堂庭廃寺復元平面図・平面現状図



宝塔復元図



安久遺跡の竪穴住居跡

平安時代のその他の遺跡

平安時代の集落跡の調査例は非常に多い。これらは主に名取・広瀬川流域の微高地に集中しており南小泉遺跡、富沢地区の下ノ内・下ノ内浦・山口遺跡など、中田地区の安久・安久東・中田畑中遺跡などがその代表例である。南小泉遺跡では掘立柱建物跡や石帯の出土等から有力者が住んでいたと考えられる。丘陵部にある燕沢遺跡は瓦や漆紙文書の出土から飛鳥・奈良時代に続き寺院もしくは役所が営まれていた可能性が高い。又、富沢遺跡では条里型地割をもった水田跡が発見されている。遺物としては鹿島遺跡（泉区）出土の愛知県北部産の緑釉陶器皿（ほぼ完形）が特筆される。

中世

中世とは一般に鎌倉時代から室町時代をいう。市内では、七北田川流域で東光寺遺跡・岩切城跡・鴻ノ巣遺跡などの遺跡が集中する岩切周辺や名取川流域の大野田・長町南周辺に遺跡が集中し、

当時の繁栄を偲ばせている。また、市内のいたるところに城館が残り、武士たちの平時の暮らしや戦さへの備えをみることができる。



中世城館分布地図（●は山城 ■は平城）

◆ 王ノ壇遺跡

遺跡番号50

太白区大野田の自然堤防上に立地する縄文時代後期～中世（鎌倉・南北朝時代）の複合遺跡である。中世の遺構には、屋敷跡や墳墓跡などがある。屋敷跡は幅3m、深さ1.5mの堀で囲まれ、内部には掘立柱建物跡・井戸跡・土倉跡・作業場跡などが存在する。中世陶器・青磁・雁股鏃・饅頭金具、温石などが出土した。墳墓跡は一辺5mの方形で周囲に溝が巡っている。溝の内側には墓壙が2基検出され、1基には棺台石が認められた。



屋敷跡の堀と掘立柱建物跡



屋敷跡全景（中央部に墳墓）

◆ 東光寺遺跡

遺跡番号51

東光寺遺跡は、仙台市宮城野区岩切、七北田川の左岸、奥羽山系松島丘陵の先端部に位置する。遺跡は、古代の横穴墓群、中世の城跡・板碑群・磨崖仏（石窟仏群）として周知されていたが、発掘調査の結果、新たに中世寺院跡・集落跡の性格が加わった古代から近世に及ぶ複合遺跡である。

本格的な発掘調査は県道泉・塩竈線の拡幅工事に伴い、昭和61年から平成2年にかけて3回わたる調査が行なわれている。

調査の結果、堅穴遺構、階段、礎石などを崖上部で検出、崖面の覆土からは多量の中世の瓦を出土し、中世寺院「東光寺」の存在を考古学的に立証した。6号石窟の「地藏菩薩坐像」は岩盤から切り取り、移設して覆屋に収めている。門前部分では、近世絵画資料「奥州名所図会」にみえる「十王堂」跡や河川跡を検出し、大量の陶磁器・土人形等を出土した。また、整地層の下部からは、14世紀頃の井戸・溝などの遺構を検出している。



東光寺遺跡全景
馬蹄形の尾根を取り囲むように城館、石窟、横穴墓、板碑群が配され、中央に寺院が位置している



東光寺の嘉暦二年（1327）銘板碑

◆ 鴻ノ巣遺跡

遺跡番号52

宮城野区鴻ノ巣地区に所在し、七北田川南岸の自然堤防上に立地する（標高約8m）。昭和48年から現在までに市・県教育委員会等により7次の小規模な調査が実施された。この中では溝で方形に区画された中世の屋敷地が2箇所確認されている。溝は幅約1mで一辺は25m以上ある。年代は鎌倉～南北朝時代が中心である。出土遺物には中国の青磁、常滑・渥美産（現在の愛知県）や地元産の陶器、舟形木製品（水に関わる祭祀に用いたか）、木製脚付盆等があり各地との交易が盛んであった事を物語っている。これらの成果は本遺跡が留守氏文書（鎌倉時代）にみえる「冠屋市庭（場）」「河原宿五日市庭（場）」「まち」の有力候補地の一つである事を示している。又「鴻ノ巣」の地名が国府の津（港）に由来するという説は近年、岩切地区が中世の国府域に含まれる可能性が有力視されつつある事から注目される。



東光寺遺跡出土土鬼瓦



東光寺石窟仏



岩切地区中世遺跡群（明治37年測図地図による）

【国指定史跡】

◆ 岩切城跡

遺跡番号53

○指定年月日：昭和57年8月23日

宮城野区岩切から利府町神谷沢にまたがる山城跡で鴻の館、高森城ともいう。南北朝時代の観応2年（1351）、足利尊氏、直義兄弟の対立にまきこまれた合戦で落城した。16世紀には留守氏の居城となっている。

高森山（標高106m）の尾根を削り、多数の平場を造り出し、要所を空堀で画しており、その範囲は東西約1.1km、南北約1kmに及ぶ巨大な山城である。南北に走る三本の尾根に造り出された平場の周囲は切り立った深い崖であり本城跡の特徴をなしている。東端の尾根に造り出された平場群は、他のそれに比べて不整形でまともに欠け時期差もしくは場の性格の違いを示している。



岩切城跡地形測量図

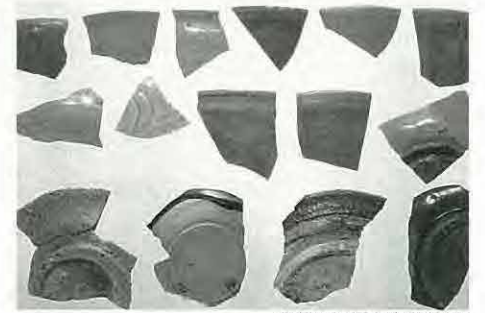
◆ 今泉城跡

遺跡番号54

若林区今泉字久保田に所在し、沖積平野の自然堤防上にある今泉遺跡内にある。本遺跡は縄文時代～江戸時代の複合遺跡であるが、このうち、中世～近世に5時期の変遷があり、その中のⅡ期～Ⅳ期（鎌倉後半～江戸初期）が城館跡と関連する。これまで、昭和54・56年の2回宅地開発に関わって調査されている。城館の規模は、推定された外堀から1辺約200mの方形と考えられる。内部はさらに溝で区画され、建物跡・井戸跡・土坑跡・橋脚跡等が検出されている。遺物は、渥美・常滑・古瀬戸・在地産陶器・美濃（志野・志野織部・黄瀬戸釉）・唐津・中国磁器（染付・青磁・白磁・天目）・かわらけ・土錘（漁具）・茶臼・粉引き臼・硯・下駄・草履・桶・柄杓・折敷・笊・箸・大足・漆器・鉄鍋・鏡・古銭・鉄鏃・刀・鎌・古銭等が出土している。



城館内の区画溝・建物・井戸がわかる



今泉遺跡出土の中国陶磁器

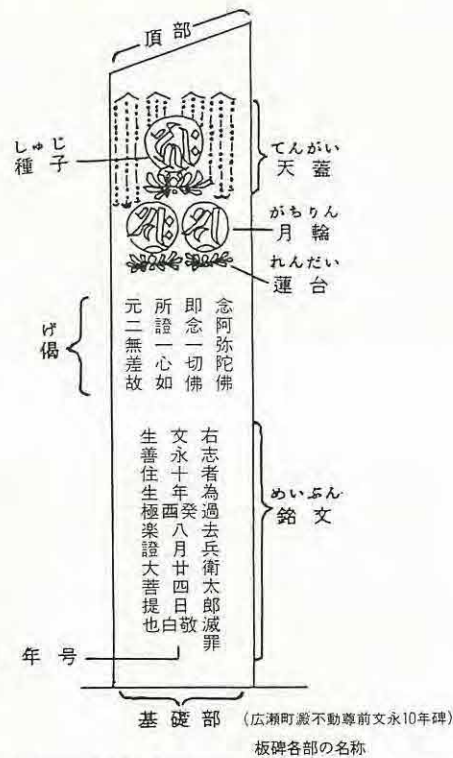
コラム13

いた び
板 碑

板碑は中世の仏教的な石製供養塔である。仏を供養することによって死者の冥福を祈り、かつ塔を建てた人の現世利益になる行為を表わしている。亡き人を供養する他、生前に自分のために冥福を祈り板碑を建てる場合もある。中世の後半になると板碑の性格は墓碑的なものや民間信仰的なものに変化していく。

板碑には仏を表わす梵字(古代インドの文字)もしくは仏の像そして仏教經典の一節、年号が刻まれている事が多いので貴重な歴史史料である。

板碑は全国的に分布し、少くとも5万基を数える。宮城県では文永5年(1268)を確実な最古例として約4000基を数える。仙台市では文永10年(1273)の青葉区広瀬町及び太白区中田町所在の板碑を最古例とし250基余を数える。この中では宮城野区岩切所在の東光寺板碑群が石窟群と一体となり、墓地・供養所である造立当初の姿を残す板碑群として注目されている。



◆ 御殿館跡

遺跡番号55

や「安永風土記」等にみられるが、館主、築造年代については不明としている。



御殿館跡

青葉区下愛子字塩柄他の広瀬川南岸、段丘面に張りだした分離丘陵に位置する。規模は東西約800m・南北約400m、頂部の標高は約185mで、段丘面との比高差は約70mである。遺構の広がる頂部平坦面は東西約300m、南北約120mである。中央部に入りこむ小さな沢によって、西郭と東郭に区分することができる。

西郭は、東西約100m・南北約120mの略方形の平場を中心として、ほぼ全域に土塁、空堀、階段状の平場が配置されている。南西部から入りこむ沢に続く空堀には土橋がみられ、ここが主要通路と思われる。

東郭は、頂部の三段の平場が中心となり、土塁、空堀が部分的に認められる。自然地形をわずかに改変した程度で、急峻な地形をそのまま利用した配置となっている。

御殿館についての記録は、「仙台領古城書上」

◆ 長命館跡

遺跡番号56

泉区加茂二丁目にある山城で東西約250m、南北約350mの規模をもつ。遺跡内には3ヶ所に大規模な平場が築かれ、堀切・土塁・井戸跡等も残っている。江戸時代以来、『吾妻鏡』文治5年(1189)の記事にみえる「国府中山上物見岡」の跡として伝わってきたが、昭和60年の発掘調査の結果、鎌倉時代中期以降の館跡であることが判明した。戦国時代には国分氏の家臣・長命氏が館主であったと推定される。



長命館跡(手前に堀切、中央に平場、右側に土塁がある)

◆ 杭城館跡

遺跡番号57

泉区西田中字杭城山にある中世山城で東西約860m、南北約400mの規模で、泉地域では最大の面積を有する。『仙台領古城書立之覚』には、「城主は山内須藤刑部少輔という者である。実沢村の山野内城を結城七郎にせめられ、この地へ落ちのび仮杭をさしぬきたてこもったので杭城と申し伝わっている」と記載されている。なお刑部は天正12年(1584)、福岡の首藤坂で討死したと伝えられている。



杭城の遠望



中世の屋敷跡を区画する溝跡(南小泉遺跡)

◆ 南小泉遺跡

遺跡番号17

若林区遠見塚・古城・霞ノ目・南小泉地内に所在し、広瀬川左岸の自然堤防上に位置する。遺跡は一時南小泉・宮城野原一帯にあった「国分寺郷」と呼ばれる中世村落の中心部とみられる。これまで宅地開発等に伴う21次の調査が行われている。調査の結果、12世紀後半頃～16世紀の居館・屋敷跡・水路跡等が検出されている。初期の屋敷は区画溝を伴わず、続いて区画溝をもつ屋敷跡へ変化し、14世紀頃に土塁を伴う居館が出現する。居館出現後は、これを中心に周辺に屋敷跡が点在していたようである。遺物は渥美・常滑・古瀬戸・在地陶器等の中世陶器、中国磁器、鉄鍋、古銭、硯等が出土している。また珍しいものでは、西国特有の瓦器碗や東海地方の山茶碗が出土している。この地は、中世中頃より国分氏が領有していたと考えられる。

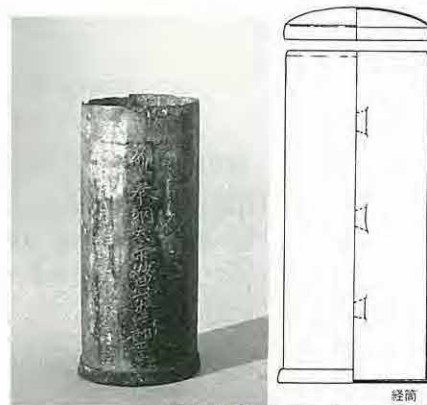


城館外堀と橋脚(南小泉遺跡)

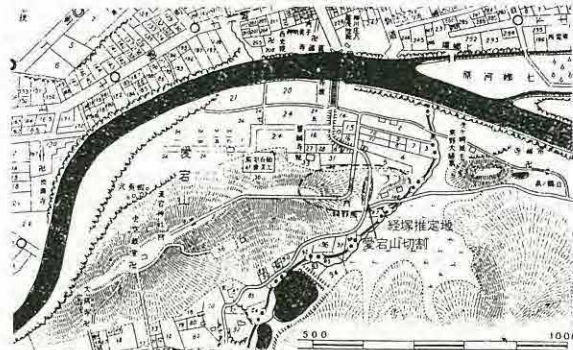
◆愛宕山経塚

戦国時代の頃、法華経を諸国の霊場に納め塚を築き、現世利益や極楽往生を説き、死者を供養する行者（聖）がいた。太白区の愛宕山は愛宕大橋などの工事ですっかり姿を変えてしまったが、この「愛宕山切割」の山上に経塚があり経筒が4個出土している。後藤兼文氏（昭和8年）によると経筒は石室の中に収められ、周辺からは刀子が出土している。経筒の中には、永楽通宝など19種83枚の中国銭が納められていたという。

経筒は高さ10cm前後、口径4cm余りで鍍金されている。筒には「奉納大乘妙典六十六部聖」あるいは「一国六部聖」、右脇に「十羅刹女」、左脇に「三十番神」と記されている。又、右脇には「信州之住玄成坊」、「越前住僧善有」、「上叟之住有傳上人」と各々、現在の長野県・福井県・群馬県住の行者の名が記されている。「享禄」・「天文」の銘が左脇に刻まれており16世紀前半代の宗教活動を示している。



愛宕山経塚出土経筒（4点の内の1）



大正期の愛宕山と経塚推定地



松木遺跡の中世屋敷跡



中世の遺構群
富沢77次調査地とその周辺の中世遺構略図

中世のその他の遺跡

中世遺跡の調査は近年めざましい成果をあげている。太白区柳生の松木遺跡では中世の屋敷地が調査され、県内産・常滑産・瀬戸産などの陶器や中国産の青磁・白磁が出土している。富沢遺跡77次調査（長町南）では土倉もしくは作業場と考えられる方形堅穴遺構3基などが調査され、「三斗三升」と書かれた木筒や鳥帽子状漆製品などが出土した。今までの調査を含めて考えると、西方の低湿地に水田域、東方の微高地に農民の屋敷地などの居住域が形成されていた事がわかる。水田跡はこの他、富沢遺跡の各地点、山口・後河原、欠ノ上遺跡などで調査されている。御堂平遺跡では平安時代～中世の仏堂が調査されている。城館跡としては戸ノ内遺跡で四郎丸館跡に関連する堀跡が調査されている。宮城野区若宮前遺跡は丘陵突端に造られた城館の一部と考えられ、付近の塚状遺構からは渥美産・須恵器系陶器が出土している。この他中世の屋敷地として高田・下飯田遺跡、小規模な集落跡として太白区茂庭の町田遺跡などが調査されている。

近

世

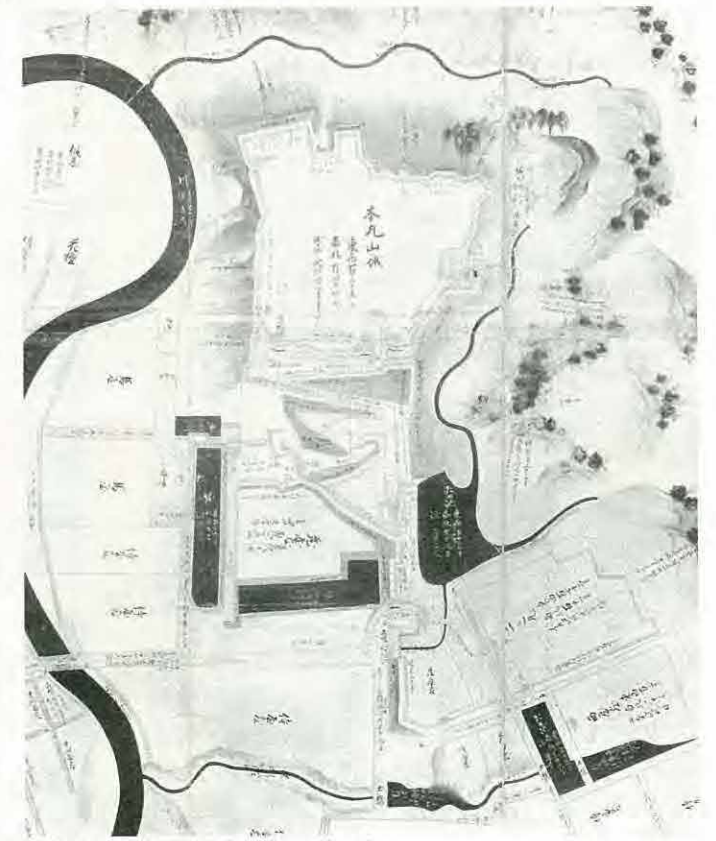
近世とは安土桃山時代・江戸時代をいい、仙台では伊達政宗以来、伊達家が仙台藩を治めていた時代といえる。現在の仙台市の中心市街地は、宮城県及び岩手県南部を治める仙台藩62万石の城下町として1600年に伊達政宗によりつくられたもので、市内には全国有数の規模を誇る仙台城をはじめとして、政宗晩年の居城若林城、歴代藩主の墓所である経ヶ峯や大年寺山（中世城郭茂ヶ崎城）など藩制時代の多くの遺跡が残る。また、大崎八幡神社や陸奥国分寺薬師堂、東照宮などの貴重な建造物が火災や戦災を免れて残り、城下町の繁栄を今に伝えている。

仙台城の調査はこれまで二ノ丸・三ノ丸について

て行われており、二ノ丸については東北大学によりたびたび調査が行われ、その全容が徐々に明らかになりつつある。また、三ノ丸については仙台市博物館建設に伴い調査が行われ、従来、米蔵と考えられていたものが、政宗の頃には庭園を持つ茶室として使われていた形跡があることが明らかとなった。また、経ヶ峯の調査は近世大名の墓所の学術調査としては極めて珍しいもので、数々の副葬品も発見されたことから全国の注目を集めた。このほか、今泉城跡からは伊万里焼や相馬焼が発見され、農村部にも陶磁器が普及していたことがわかり、松森焰硝蔵では火薬蔵の構造がわかる、などの成果が得られている。



仙台城遠景（明治初期）
手前に藩の倉蔵、中央に木橋の頃の太橋、三ノ丸入口に外繫（厩）、大きく屈折して大手門にいたる。遠く二ノ丸殿舎が、左上方に寅の門が見える。



奥州仙台城絵図（斎藤報恩会）に描かれた仙台城
正保2年（1645）の製作で仙台城の絵図としてもっとも古いものである。本丸詰門左右の脇櫓、長櫓、翼櫓などが描かれていて仙台城のもっとも完成した姿を示している

◆ 仙台城跡（二ノ丸跡）

遺跡番号58

青葉区川内に所在し、広瀬川が形成した段丘面（上町段丘）上に位置する。この地は、当初武家屋敷だった所で、寛永15年（1638）に二ノ丸が造営される。昭和49年に仙台市教育委員会が最初の調査を行い、以後、東北大学考古学研究室、同大埋蔵文化財調査委員会が計11ヶ所の調査を行っている。いずれも東北大学の施設建設に伴うものであり、今後も継続的な調査が行われるであろう。調査では、二ノ丸最終段階の礎石建物跡、中奥関連の建物群、二ノ丸（元禄期）以前の「西屋敷」と推定される屋敷跡・庭園跡・畑跡、二ノ丸以前で17世紀初頭の屋敷跡等が検出されている。また、二ノ丸隣接の武家屋敷地の一部も調査されている。遺物は、唐津・美濃（志野・織部）・中国磁器・切込・平清水・大堀相馬等の陶磁器、多量の漆器、木簡等が出土している。



文学部屋上からみた二ノ丸（西屋敷時代）の遺構



陶製人形（17世紀）



遺物出土状況 下駄とうさぎの手あぶり

◆ 仙台城跡（三ノ丸跡）

遺跡番号58

青葉区川内三ノ丸跡に所在し、青葉山段丘下の下町段丘面上に位置する。博物館新築やその外構工事に伴って、これまで3回の調査が行われている。調査の結果、6時期の変遷が明らかにされ、確かに三ノ丸に米蔵があったことが木簡（荷札）等の出土で確認された。また、特に注目される点は、三ノ丸造営以前に屋敷跡が存在していたことである。屋敷跡から、建物跡・土坑・暗渠・池跡等が発見された。発見された建物跡の中で、池跡の北側のものは四阿、北西部の礎石建物跡は茶室と推定されている。遺物は米蔵の時期のものでは、瀬戸・美濃、唐津、京焼、大堀相馬、堤、伊万里の陶磁器や漆器・箸等が出土している。屋敷跡の時期には、志野・織部・唐津・備前・丹波・信楽・中国磁器・漆器・箸・「元和」銘木簡等、初代政宗の時期の遺物が出土している。



仙台城三ノ丸跡 政宗時代の池跡の一部（上の石は暗渠）



政宗時代の陶器（織部）



美濃焼水指

【仙台市指定史跡】

◆ 経ヶ峯伊達家墓所
（瑞鳳殿ほか）

遺跡番号59

指定年月日：昭和59年7月21日

青葉区霊屋下に所在し、青葉山段丘上（経ヶ峯）に位置する。この遺跡は仙台藩祖伊達政宗から三代綱宗の墓所として知られている。瑞鳳殿は、政宗死去後その廟所として寛永14年（1637）に完成した。この建物は、桃山時代の建築様式をとどめた江戸時代初期のすぐれた霊廟建築として昭和6年に国宝に指定されたが、昭和20年の仙台空襲によって隣接する廟所感仙殿（二代忠宗）、善応殿（三代綱宗）と共に焼失した。昭和40年代に再建の気運が高まり、昭和49年には再建に伴う事前の発掘調査が行われた。調査の結果、墓室は切石の石室構造をもち、遺体は駕籠の中の棺桶に安置されていることが確認された。棺桶の北寄りの空間には、数多くの副葬品が置かれていた。主な遺物には具足一領・鎧櫃・糸巻太刀・脇差・蒔絵箱・鏡・櫛・硯・筆・鉛筆・日時計・金製ブローチ・冠・石帯・蒔絵・印籠煙管等がある。副葬品の多くは保存・修復処置がなされ、仙台市博物館で公開している。また、墓室上部の霊廟も昭和52年に再建されて一般に公開されている。

その後、感仙殿・善応殿についても昭和56年に再建計画が決定され、同感仙殿、昭和58年に善応殿の調査が行われた。感仙殿の墓室構造及び埋葬方法は瑞鳳殿とほぼ同様であり、副葬品として具足一領・糸巻太刀・打刀・脇差・烏帽子等が納められていた。善応殿では石室内に箱を納め、その中の甕棺に遺体を安置する方法をとっている。副葬品として、打刀・脇差・煙管・眼鏡・柄鏡・鏡架・鉞・定規・竹製規・香木・蒔絵合子・長手箱・蒔絵櫛・紅皿・小判等が納められていた。この二つの廟は昭和60年に再建されている。大名家墓所の調査は、全国的に希有で貴重なものであった。



再建前の瑞鳳殿本殿跡



瑞鳳殿石室内副葬品遺存状態



糸巻太刀



黒漆蒔絵箱

（以上財瑞鳳殿）

◆ 養種園遺跡

遺跡番号60

若林区南小泉一丁目の養種園跡地を中心に所在し、広瀬川左岸の自然堤防北端に位置する。古墳時代の集落跡、および中世～近世の屋敷跡である。これまで、区役所・共同住宅・社宅改築に伴う試掘、若林区文化センター及び都市計画街路の建設に伴う調査が行われている。調査の結果、古墳時代中期の住居跡5軒、中世・近世の屋敷跡の一部が判明している。特に、近世の屋敷跡では大規模な池跡、屋敷堀跡などが検出された。これらの遺構は文政9年(1826)に描かれた「国分小泉御屋敷御絵図」の内容と一致するものが多い。本遺跡は4代藩主伊達綱村が元禄5年(1692)に造営させたという「別荘」に該当するものと考えられる。遺物は、肥前磁器、陶器(瀬戸美濃・唐津・京焼等)、中国磁器、瓦質挿鉢、漆器、茶臼、炭化米等が出土している。



養種園遺跡全景(左手は若林区役所)



近世の屋敷跡



西館跡 入口部石垣 (宮城県教育委員会)

[仙台市指定史跡]

◆ 西館跡

遺跡番号61

○指定年月日: 昭和62年11月1日(昭和50年12月11日)

青葉区下愛子字栗生館田、西風藩山北麓のゆるやかな台地上に位置する。西館は、茂庭綱元の仙台下屋敷で、その後、伊達政宗の長女五郎八姫の御仮御殿となったとされている館跡である。現在も土塁・空堀・石垣・井戸・池・平坦面等がよくのこされている。昭和62年の県教育委員会による調査で、仮御殿としての普請時に構築されたものと考えられる石垣遺構が発見された。

[仙台市指定史跡]

◆ 松森焰硝蔵跡

遺跡番号62

○指定年月日: 昭和63年3月1日(昭和62年5月1日)

仙台藩の焰硝蔵(火薬貯蔵庫)は鷺ヶ森・砂押・越路などにあったが現存しているものはここだけである。松森の焰硝蔵は、元来3基あったが現在残っているのは1基だけである。昭和57年の発掘調査では、5m×10mの蔵跡と、それを囲む配水溝や石敷の通路などの遺構と、平瓦を中心とした瓦類・五徳・陶器製の箱・砥石・陶磁器類・鉄砲玉などの遺物が出土している。また、爆発事故のあったことを示す巨大な孔(クレーター)も発見されている。

なお、現在保存されている焰硝蔵については発掘調査は行っていないが、東西約40m、南北約27m、高さ約3mの周囲に巡らした土塁は当時の姿をよく残している。



松森焰硝蔵の蔵跡



環境整備され保存された蔵跡

江戸地代のその他の遺跡

南小泉遺跡からは、伊達政宗晩年の居城である若林城跡(現・宮城刑務所・一部調査)の造営に伴い割り出された、江戸時代初期の城下町の一面が調査されている。また、近接する遠見塚一丁目の調査では武士の屋敷跡が発見され、墓壇からは金箔瓦が県内で初めて出土し、その由来について話題を呼んだ。柳生の松木遺跡では伊達家家臣福田氏に関わる建物跡や井戸跡等が調査されている。山田条里遺跡の調査では文政5年(1822)の絵図の「ヤチヤンキ」に相当する地点で江戸時代後期から明治時代前半頃の屋敷跡が調査され、下駄などの木製品や多量の陶磁器が出土している。若林区六丁の目の北屋敷遺跡も江戸～明治時代の屋敷跡である。宮城地区では臨濟院寺跡が調査されている。太白区の丘陵南縁に、かつては6kmにわたって築かれた杉土手(鹿除土手)も一部調査され、その構造が判明している。近世墓地の調査も富沢遺跡や新妻家墓地(北根)等でなされている。また、この時代の水田については富沢遺跡などで水田と用水路との関係が明らかにされつつある。



南小泉遺跡出土の金箔瓦

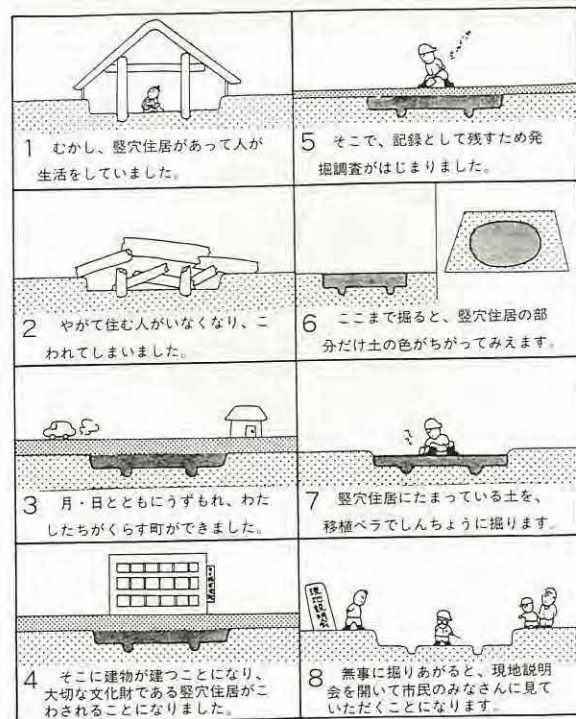
遺跡の発掘調査と成果の活用

遺跡発掘調査

「遺跡」とは過去の人間の生活や行動の跡が残されている土地をいう。河川のはん乱や火山灰などで埋もれている事が多く埋蔵文化財包蔵地とも呼ばれ、堅穴住居跡などの、地面に掘りこまれた「遺構」と土器・石器のような「遺物」からなる。遺跡は現在の地表面の遺物の散布などにより発見されることが多い。私たちは遺跡の発掘調査によって過去の人々の生活や環境を知ることができる。近年、開発の急増により、遺跡は発掘調査の後、失われてしまう事も多いが、21世紀の「まちづくり」に遺跡を生かしていくことも重要な課題となっている。

遺跡の発掘

遺跡の発掘のながれを、堅穴住居を例にみてみると次のようになる。



発掘調査の流れ

成果の公開（普及活動）

発掘調査成果など文化財全般についての、理解を深めるために現在、仙台市では次の活動を行っている。

- 1) 現地説明会
発掘調査成果について、一般市民を対象に調査している現地で、遺構・遺物の実物を展示しながら説明会を行っている。
- 2) 遺跡見学会
学校・その他の団体を対象に、発掘調査のようすや、主だった遺構・遺物について説明を行っている。
- 3) 発掘調査体験学習
学校・その他の団体を対象に、遺跡で実際に発掘調査を体験する。
- 4) 夏休み親子縄文体験
夏休みを利用して、市内の小学校6年生とその父母を対象に縄文時代の様々な体験をする。(縄文土器作り、野焼き、縄文食体験他)
- 5) 文化財展
年に2回(初冬「テーマ」展、年度末「発掘この一年」)市内の展示場(ホール)及び区役所ロビーで、文化財に関する展示会を行う。また「テーマ」展では記念講演会も開催する。
- 6) 広報文化財
年に5回、文化財に関する特集・速報・行事等について掲載した「広報文化財」を発行。仙台市立の小・中・高校及び各区役所・市民センター他(仙台市の各公所)に配付している。
- 7) 文化財パンフレット
埋蔵文化財・民俗芸能・建造物等の文化財に関する内容を特集したパンフレットを作成している。



発掘体験学習



文化財展

仙台市略年表

	年代	仙台に関連する主なできごと
旧石器	10数万年前	市内に旧石器時代人が住みはじめる(青葉山B遺跡)
	5~6万年前	●段丘上に人が住む(山田上ノ台遺跡・北前遺跡など)
縄文	2万年前	●冷涼な気候で針葉樹が繁茂する(富沢遺跡)
	1万年前	縄文土器の製作が始まる
弥生	8千年前	●河岸の丘陵地や段丘上に集落が営まれる
	紀元前300頃	●平野部にも集落が営まれるようになる
生	紀元前後	弥生土器の製作が始まる
	4世紀前半	稲作が開始される(富沢遺跡)
古	4~5世紀前半	●南小泉等に大規模集落が形成される
	5世紀中葉	方形周溝墓がつくられる(戸ノ内遺跡・安久東遺跡)
墳	645	遠見塚古墳などの前方後円墳がつくられる・首長層の成立
	7世紀後半	●市内南部を中心に古墳群がつくられる
飛鳥・奈良	7世紀末	大化の改新・このころ陸奥国が置かれる
	710	●横穴墓群が大野寺山周辺や燕沢などにつくられる
平	7世紀末	郡山にI期官衙が造営される
	724	郡山にII期官衙が造営され、附属寺院が建立される
鎌倉	710	平城京に遷都を行う ●台原・小田原丘陵で築城が栄える
	724	陸奥国府多賀城が大野東人によって築かれる
安	740~50年代	陸奥国分寺・陸奥国分尼寺が建立される
	780	伊治公皆麻呂が反乱をおこし、多賀城が焼失する
南北朝・室町	794	平安京に遷都を行う・坂上田村麻呂の奥州遠征
	802	鎮守府を多賀城から胆沢城へ移す。蝦夷の長アテルイが降伏する
江戸	934	陸奥国分寺七重塔、雷火で焼失 ●このころ堂庭山に宝塔が建立される
	1051~62	●荘園が市内各地にできる。武士団が成立する
安	1083~87	前九年の役(阿部氏滅ぶ)
	1124	後三年の役(清原氏の内乱、源義家が活躍する)
鎌倉	1189	中尊寺金色堂建立。●奥州藤原氏栄える
	1192	源頼朝、奥州藤原氏を滅ぼす(国分鞭館〔榴岡〕などで合戦)
南北朝・室町	1333	源頼朝、征夷大将軍となる・伊沢(留守)氏、葛西氏が奥州に赴任する
	1334	●板碑が市内各地に建立される
南北朝・室町	1351	●岩切で定期市が開かれるなど、栄える
	1354	北畠顕家、後醍醐天皇の命により義良親王と共に多賀国府に入る
江戸	1542	建武の新政 ●南北朝動乱
	1589	奥州管領畠山氏、吉良氏に敗れる(岩切城の合戦)
江戸	1591	大崎(斯波)氏奥州探題となる●大崎氏栄える(中心地古川)
	1600	●市内各地に城館がつくられる
江戸	1607	●国分、留守、栗野、伊達の諸勢力が仙台地方に割拠する
	1627	天文の乱おこる(伊達家の内紛)
江戸	1637	伊達政宗、会津の芦名氏を滅ぼす
	1638	政宗、居城を米沢から岩出山に移す
江戸	1646	関ヶ原の戦い・政宗、仙台城の縄張りを始める
	1736	大崎八幡神社、陸奥国分寺薬師堂が完成する
江戸	1804	政宗、隠居所として若林城を築城する(1639年破却)
	1868	経ヶ峯に政宗の霊屋瑞鳳殿が完成する
江戸	1868	伊達忠宗、仙台城二ノ丸の造営を始める
	1868	大地震が起こり、仙台城の三重の隅櫓(4基)等が倒壊する
江戸	1868	学問所が開設される。(1760養賢堂と改称)
	1868	仙台城二ノ丸焼失。(1809年再建)
江戸	1868	明治維新・仙台城本丸破却される
	1868	